

アカデミック・リンクの取り組み

千葉大学における新しい学習環境の構築

講演要旨

(2012年10月23日, 兵庫県大学図書館協議会研究会)

竹内 比呂也

千葉大学附属図書館長, アカデミック・リンク・センター長, 文学部教授

1. 背景

大学図書館の役割が, その親機関である大学の教育研究を支援することにあるのは自明のことではあるが, 社会環境の変化に伴い, その姿に大きな変化が見られるようになってきている。米国の University Leadership Council が 2011 年に公表した『大学図書館機能の再定義』において示されているように, 伝統的な図書館サービスに対する需要は減少しているし, 資料の電子化, 予算削減, 職員数の減少などの影響をうけたサービスポイントの減少は北米の研究大学における図書館に共通して見られる傾向である。

日本の大学図書館は, 新制大学の発足以降, 教育および学習に資するための環境の整備につとめてきた。これは 1950 年代のレファレンスルームの設置にはじまり, 指定書の拡充(1960 年代), 情報リテラシー教育の発展(1990 年代), ラーニング・コモンズの設置(2000 年代)と, その時々米国の大学図書館の動向をフォローする形で続いてきた。しかしながら, このような図書館の努力にもかかわらず, 高等教育を提供する側では必ずしも学習・教育における図書館の活用を意識してきたとは言えず, 高等教育に関する政策的な文書で, 図書館について言及されることはほとんどなかった。2008 年 12 月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」以降, アクティブ・ラーニングの推進や単位の実質化(=学修時間の確保)のための具体的方策が活発に議論されるようになり, 文部科学省の一連の助成事業(GP)を通じて大学図書館を使った学習支援の試みがなされるようになるなかで, 図書館へ関心が向くようになったと言える。さらに中央教育審議会大学教育部会の審議まとめ(2012 年 3 月 26 日)や文部科学省による『大学改革実行プラン』(2012 年 6 月), 中央教育審議会答申(2012 年 8 月 28 日)においても, 大学図書館機能の強化の必要性について言及されるようになっており, 学習の質を高める上で図書館のもつ役割が認められるようになった。

2. アカデミック・リンク構想への道

千葉大学が2011年度から実現に向けて取り組んでいるアカデミック・リンクは, 今日の大学に対する社会的要請への千葉大学としての回答の一つである。自ら課題を発見し, それを解決できる能力を持ち, 今日の知識基盤社会を生き抜くことができる人材を養成してほしいという要請に対して, 図書館機能をベースとして新しい学習環境を構築し, それを通じて学生のアクティブ・ラーニングを推進しようとしている。アカデミック・リンク

は、「学習とコンテンツの近接による能動的学習の促進」を当面実現すべき課題としており、学習・教育に必要な「コンテンツ」、コンテンツの作成・提供のための「(情報通信)技術」、そして「教育そのもの」という、知識基盤社会において教育改革を実行するために必要な三つの要素をその基礎としている。これは提供側の視点での説明であるが、学生の側から見れば、アカデミック・リンクとは、自由に学習を行うことができる快適な空間、そこで利用するコンテンツ、そしてそこでの学びを支える人的サポートが有機的に結合し、なおかつそれらを自在に手に入れることができる場所であり、機能である。千葉大学では図書館をなんらかの形で変えようという構想は1990年代後半からあったが、その構想は挫折し、およそ10年のブランクの後、図書館旧館の耐震改修を契機として、新たな構想を打ち出すことになった。結果的には、上に述べた中央教育審議会の審議のまとめに先駆けて図書館機能の強化による新しい学習環境の構築の具体化をすすめることになり、関係者の注目を集めることになった。

3. 知的刺激満載の場

アカデミック・リンクのような場所を学生のアクティブ・ラーニングの促進に活かすためには、そこが学生から見て知的刺激溢れる場所でなければならない。そのような刺激の源泉は、ここで学ぶ人たちの姿をお互いに見ることであり、増設した施設の設計において、このことを強く意識した。すなわち「見る」「見られる」学習空間であって、外からも見える学習席、ガラス張りのグループ学習室、建物外のコリドーとも一体感のあるプレゼンテーションスペースなどはその典型である。また、人的支援についても、学生、図書館員、教員が開放的な空間に席を持ち、学生が議論している空間の一角で様々な支援活動を行っている。

このような空間を生かす活動の一例として、「1210あかりんアワー」と名付けられたセミナーシリーズがある。昼休みの30分という比較的短い時間ながら、学生が自由に入力できるプレゼンテーションスペースで、教員、職員が講師となってショートセミナーを実施している。内容面でも研究活動の紹介のみならず、楽器の演奏、ブックトークなどプログラムの内容は多彩である。学生のアクティブ・ラーニングにつながる知的な刺激として、授業も相対化される。セミナー、授業、あるいは相互に学習する姿を見ること、偶然聞こえてくる議論の中のキーワードなど、様々な手がかりをもとに、コンテンツを活用したアクティブ・ラーニングへと導かれるのである。

4. コンテンツの重要性

アカデミック・リンクの特徴の一つはコンテンツを十分に活用した学習を実現しようとしている点である。その根幹には、千葉大学附属図書館が2006年度に開始した「リエゾン・ライブラリアン・プロジェクト」と名付けられた教員と図書館員との連携を強化する活動がある。この活動の核は、2007年度から開始した、普遍教育センター(千葉大学において全学の教養教育を統括するセンター)との連携による「授業資料ナビゲータ」である。これは特定の授業の受講者向けに、学習を深め、事前事後学習に役立つ図書やweb上のサイトを紹介するパスファインダーを授業担当教員と図書館員が協力して作成するので、2011年度には73科目について作成されるまでになった。この活動を通じた教員と

図書館員の関係強化と、図書館が直接的に個々の授業科目に関与するという試みが、アカデミック・リンクにおいて、授業を最初の手がかりとしてコンテンツの利用を促すという基本方針につながっている。そして、「授業資料ナビゲータ」掲載資料については、見せる書棚である「ブックツリー」に排架することで「見せて」いるのである。

アカデミック・リンクの実現のためには、学習・教育に利用可能なコンテンツが安定的に、学生に見える形で供給されることが不可欠である。より具体的に言えば、なるべく多くの出版物が電子化され、本文中の文言で検索でき、そして各利用者の嗜好にあった形態（冊子体も含む）での、購入を含めた入手可能性を高めること（そのために、書店を図書館と同じ建物の中に設置するとともに、プリントオンデマンドを可能にする環境を整備する予定）と、e-learning環境が整備されてlearning management system(LMS)を介した教材の電子的提供が一般化する中で、教材としての講義動画の中やあるいは一般的な教材において、著作物の一部をスムーズに利用できる環境を創出すること（そのために許諾を得るためのサポート体制の提供）が必要である。また、さまざまな著作物のある一章や雑誌論文によって構成される「コースパック」の電子的利用といった、従来の流通単位とは異なるパッケージ化と授業での利用についても簡便な手続きでこれを実現できることが強く望まれる。これらの実現のためには、権利処理環境の劇的な改善とともに、これまでの電子媒体と紙、あるいは図書と雑誌論文といった、対象コンテンツごとにバラバラであった検索環境を統合し、「何があるか+どのように入手できるのか」という情報を一括して利用者に提供できるようなインターフェースがどうしても必要である。

5. 今後の課題

2012年3月16日に増築部分を含む新しい図書館がオープンし、アカデミック・リンクの概念の下、新たな学習空間の提供が始まった。学生たちは我々が想定したよりも早く新しい学習空間に慣れ、活き活きとこれを使っている。人的サポートも定着しつつあると言ってよいだろう。しかし、コンテンツの提供に関する部分に関しては、特に電子的提供を実現する上での課題、すなわち電子化し、学習に資するコンテンツとしての利用を可能にするための権利処理の煩雑さや権利者（あるいは出版社）の理解を得る上での困難さが顕在化している。これらの課題は必ずしも一大学で解決しうるものではなく、大学間の連携が必要となろう。

大学図書館が、従来扱ってきた資料の範疇を超えてコンテンツを扱う学内拠点となることは、これからの図書館の基盤を強化する戦略としては重要であり、その戦略の中で専門職としての「新しい図書館員」を確立することもアカデミック・リンクのアジェンダの一つである。そのための取組みの強化にも引き続き取り組んでいく。